



## 追悼文

### 多田政子さんを偲んで

幹細胞リプログラミングの分野で先駆的な研究をされた東邦大学多田政子さんは、日本エピジェネティクス研究会の幹事を務められ、女性研究者支援活動の同志でもありました。昨年 5 月から家族と共にがん治療に専念するために京都に移られて、2023 年 10 月 21 日にご逝去されました。

多田政子さんと私たちの出会いは 2017 年 10 月、Susan Gasser 博士(現 ISREC 所長、元 FMI 所長、スイス)の呼びかけで東京周辺の染色体・クロマチン・核ダイナミクスに興味ある女性研究者が集まった夕食会において、でした。多田政子さんのお名前は、リプログラミングに関して ES 細胞と体細胞の細胞融合実験で先駆的な発見をなされ、エピジェネティクス研究分野でいち早く教授として独立された女性研究者として尊敬と憧れを持って知っていましたが、直接お話しする機会はありませんでした。鳥取大学染色体工学研究センターからその年の 4 月に東邦大学理学部生物学科に異動されたことをお聞きして、思い切って Susan を囲む夕食会にお誘いしました。多忙な中、会の終了間際に駆け込んでくださった多田政子さんは、甘く優しい声で私たちに叱咤激励して、独立直後あるいはこれから独立を目指す女性研究者に勇気を与えてくださいました。

その後 2019 年に Susan を囲む夕食会は、女性クロマチン研究者の会である WiSJ (Women in Science, Japan <https://www.wisj.online/about-us>)へと発展しました。WiSJ は、当時圧倒的マイノリティであった日本の女性研究者を、海外の超一流女性研究者とタッグを組んで応援し、日本人女性研究者の国際的認知度を高めるために自ら国際学会を開き、さらに PI として必要な研究室マネジメントについて体系的に学ぶ機会を作ろう、との趣旨で始まりました。それら活動の第一歩であるホームページの立ち上げを自ら買って出してくれたのが、行動

力に優れた多田政子さんでした。2020 年に開催した WiSJ 主催シンポジウムにおいても、多田政子さんはオーガナイザーの一員として活躍されました。準備段階では、いつも絶妙なタイミングで指示を出し方向性を示してくださり、頼りになる姉貴のような存在でした。また分子生物学会ではキャリアパス委員会委員を務められ、物腰柔らかかに本質的なコメントを若手研究者に発信されました。研究室においても、きっと同じように学生をサポートして導かれていたことと思います。

2022 年 5 月には、第 15 回日本エピジェネティクス研究会年会で新幹事講演を控えていたところに、急遽治療となりました。そのため着任して間もない山口新平さんに研究室を託して、千葉から京都に移られました。引っ越し間際にご自宅に WiSJ のメンバーで訪問すると、バラや緑に囲まれた家の中、Gurdon 研究所 Azim Surani 研究室に留学中に入手したものを取り入れた、英国アンティーク調の落ち着いた居間に案内してくださいました。美味しいお茶を振る舞われ、研究協力者と共に築いた研究成果を世に出すべく、京都で論文執筆活動に励むと伺いました。エピ研年会には参加できそうにないと話された多田政子さんでしたが、これまでの、そしてこれからの彼女の DNA メチル化を中心としたエピジェネティクス研究を、見事に動画で発表されました。おそらくご本人は気付いておられなかったと思いますが、動画には録画時刻が残っており、それは真夜中の誰もいない研究室でした。これから始まる闘病に対する不安以上に、後ろ髪を引かれる思いであったことと思います。そして翌年、京都での治療が静養に替わる頃になってもなお、体調の優れない中、研究協力者の好意に報い、集中力を保って論文を仕上げるために薬を選んで論文執筆に向かわれている様子を伺い知って、大きな衝撃を受けました。ど



んな逆境にも屈することなく、己が探究して見出した真理を世に残す研究者のあるべき姿を、多田政子さんの生き様は示していると感じます。また女性研究者支援においても、多田政子さんは常に時代の半歩先、一歩先を見据えておられ、先駆者として私たちを牽引してくださると信じて疑いませんでしたので、こんなにも早いお別れが残念でなりません。

優しい笑顔で、研究仲間や学生、そして闘病中に迎えられた新しいご家族に囲まれて、生を全うした多田政子さんは、いつまでも私たちの心の支えとして生き続けるでしょう。心からご冥福をお祈り申し上げます。

浦聖恵（千葉大学 理学部生物学科）

斉藤典子（がん研究会 がん研究所）

岡田由紀（東京大学 定量生命科学研究所）



Susan Gasser 博士の発案で行われた国際女子会。  
多田さんは前列左端。2017年10月。



治療のために京都へと引っ越しする間際、千葉のご自宅にて WiSJ メンバーとお茶会。多田さんは前列中央。2022年5月。



## 多田政子さんを偲んで

細胞核のリプログラミングやDNAメチル化制御の研究でご活躍され、エピジェネティクス研究会の幹事も務められている多田政子さんが亡くなられた。北大の高木信夫先生の研究室で大学院生として、ともにX染色体不活性化やゲノムインプリンティングの研究に携わって以来30余年の付き合いの友人をこの年で亡くすことはあまりにも悲しい。学生時代、彼女はみんなに「まさちゃん」と呼ばれていた。年下であったにもかかわらず僕も調子に乗って彼女を「まさちゃん」と呼び、親しくさせてもらった。それ以来、僕らにとって彼女はずっと「まさちゃん」であり、いい年したおっさんがキモいかもしれないがここでもいつも通り「まさちゃん」と呼ばせてもらおう。まさちゃんは僕のことをいつも「さどくん」と呼んでくれていた。あのふんわりとした響きは、「佐渡君」ではなく「さどくん」だった。学会などで会うたびに、「さどくん、元気い？」と昔と変わらぬ笑顔で近寄ってきてくれて、そのたび僕の気分は一瞬であの楽しかった高木研時代に戻り、互いのラボや研究のこと、最近の楽しいこと、辛いことなど、いろいろ話をした。

僕が初めてまさちゃんに会ったのは彼女が北大の動物染色体研究施設(染研)の佐々木本道先生のもとで核型解析のエキスパートとしてテクニシャンを始めた1989年の春である。僕は遺伝子実験施設の高木先生のラボの修士1年の学生だった。高木先生が染研から独立されて間もなかった当時、高木研と染研はジャーナルクラブやハイキングなどを合同で行っていた。そのため、まさちゃんと顔を合わせる機会は多かったが、そのころは会っても二言三言話をするくらいだった。しかし、その後まさちゃんがいろいろな事情で見送っていた博士課程への進学を決め、なんと高木研の大学院生となったので、それからは学年こそ後輩にはなるものの研究者としてはずっと先輩のまさちゃんにいろいろな意味で影響を受けることになった。二人のお子さんを保育園に預け、9時から5時までの限られた時間を効率的に使い、計画的に実験を進める毎日を送って

いたまさちゃんには、僕らとは次元の違うモチベーションと覚悟のようなものがあった。ラボでの彼女はいつも楽しそうだったが、こだわりを持って納得いくまで実験をしていた。DNA-FISHのサンプルを観察するときにはいつも、暗い空間を作るため黒いビニールのごみ袋で顕微鏡と頭をすっぽり覆い、顕微鏡をのぞき込んでいたが、たまに袋から顔を出すと少し眩しそうにしながら満足げな笑顔を見せる。写真をデータとして残すにも当時はデジカメなんてないので、気に入った一枚を求め、露光時間を少しずつ変えて同じ分裂像を何枚もリバーサルフィルムで撮影していた。細胞融合後の4倍体のマウス細胞の核型解析でも、実験やお子さんの話を楽しそうにしながら、自分で焼いた写真に美しく広がる80本の染色体を1本1本はさみで切り取り、ピンセットでつまんで1番からX染色体までをあっという間に並べてしまう。その様はまさに職人技だった。高木研ではとにかく楽しそうに実験していたまさちゃんだが、研究に取り組む姿勢に妥協はなく、大学院生として自分で考え、主体的に研究を進めることの大切さをそばで見せてくれていたように思う。お互い高木研を出た後もどういうめぐり合わせか、ラボこそ違うものの、同じ時代にイギリスのケンブリッジや遺伝研でも一緒に過ごすことになり、公私ともに本当にお世話になった。その後は、京大やリプロセルの研究者としてリプログラミング研究に大きな足跡を残され、ついには鳥取大染色体工学研究センターの教授になられた。2017年に東邦大学理学部生物学科に異動されてからはPIとして多くの学生を指導されていた。教授になったまさちゃんは貫録を増し、オリジナリティーの高いサイエンスを展開しつつも、いつも学生を思いやり、優しく導いていたように思う。病氣療養中も「私を支えてくださった仲間たちに対して責任を果たすために一本でも多く論文をまとめたい」と学生や共同研究者を仲間とよび、最後の最後まで執筆をつづけていた。「自分は人に恵まれました。良いこと>>>悪いことの割合で、生き方が不器用だった自分には上出来だ



と思っています」というのがまさちゃんと交わした最後のメールだった。あまりにも早い別れで悲しくてたまらないが、まさちゃんは研究者人生を生き切ったと思うしかない。様々な心配や苦労があったはずだが、仲間に感謝することを忘れず、常に前を向い

て自身のサイエンスに真摯に取り組んでいたまさちゃんの姿を忘れることはない。

佐渡 敬 (近畿大学農学部)



佐々木本道先生退官記念パーティでの  
佐渡とまさちゃん (1990年3月)



高木先生の教授就任のお祝いの席での  
高木先生とまさちゃん (1993年4月)

**日本エピジェネティクス研究会事務局**

群馬大学 生体調節研究所

生体情報ゲノムリソースセンター

ゲノム科学リソース分野内

庶務担当幹事：畑田出穂，担当：岩田浩美

住所：〒371-8512 群馬県前橋市昭和町3-39-15

TEL: 027-220-8111

E-mail: [jse-jimukyoku@ml.gunma-u.ac.jp](mailto:jse-jimukyoku@ml.gunma-u.ac.jp)